

## 資料紹介

# 児山紀成 蝦夷紀行 中巻

梅原 達治

はじめに

ここに児山紀成の『蝦夷日記』として知られる本書をとりあげたのは、本誌前号にとりあげた『金蔵オロシア行』について周辺文献を渉猟検討中に、嘉兵衛拘束の遠因、つまり、ゴロウビン事件の発端となった、文化魯冠を受けた択捉島の日本の防衛に関する記載であるとともに、択捉、国後両島、さらに、同地の原住民についての記載も関心を抱かされる。この先住民にたいする無知と無理解にもとづく記載についてはあらためて論じることとする。

紀成の『蝦夷日記』は、一八九一年に畠山健編、『桂園遺芳』に児山紀成の『蝦夷日記』として収載されている。これは一読して解るが、歴史、ことに北方事情には疎い文学者が編集したもののようで、その点留意して読む必要がある。

現在、一般に読まれるものは、三一書房刊行の「日本庶民生活資料集成」に収録されたものであろう。これは高倉がその解題で述べているように、畠山編と同じものであり、北海道庁所蔵のものは、その草稿にあたるもので、史料としての価値は高いとしている。未刊行の道庁蔵の草稿の復刻を試み、僅かな注解を付すこととした。

紀成の『蝦夷日記』と呼ばれているものの写本が北海道庁文書館に三種保存されている。その内容は殆ど同様であり、マイクロフィルム化されているものを底本として用いた。これには上野図書館の複写である旨の注記があるが、現在見当たらない。

# 摘要

## 上 卷

文化五辰（一八〇七）年 （ ）内はグレゴリウス暦

一月二八日（二月二十四日）（東京都）千住（千葉県）松戸 二九日（茨城県）小金原 二月一日（二月二十六日）土浦 二日水戸 三日助川 四日神岡 二月五日（三月一日）（福島県）平 六日久ノ浜 富岡 七日原の町 八日中村 九日（宮城県）亘 一〇日仙台 一一日 一二日 筑館 一三日（岩手県）一の関 一四日水沢 一五日花巻 一六日盛岡 一七日沼宮内 一八日一戸 一九日（青森県）三戸 二〇日五戸 二一日七戸 二二日野辺地 二三日横浜 二四日田名部 二五日異国澗 二六日佐井 二七日風待 二八日風待 二九日津軽海峡（北海道）箱館 三〇日多忙 三月一日（三月二七日）渡島準備 二日風待 三日難祭り 四日 三月六日（四月一日） 七日江戸の消息 八日九日一〇日一一日一二日一三日一四日一五日一六日一七日一八日一九日二〇日二一日二二日二三日二四日二五日 昨年の箱館の防衛体制の視察 二六日渡島準備 二七日二八日二九日三日 四月一日（四月二六日）仙台藩備頭日野英馬と対面 乗船準備 二日 乗船 三日箱館出帆 四日襟裳沖 五日乗船吹き戻される 四月六日（五月一日）追手風に変わる 七日十勝沖通過 八日厚岸近接 九日善法知着 一〇日同地停泊 一一日風待 一二日風待 一三日勇留島着 一四日 国後島の西側を航行 一五日 択捉島に近接 留呂江に停泊 一六日 国後島東岸仮泊 一七日 海荒れる 一八日平穩 一九日 国後島アトイヤを離れ 択捉島振別着

## 中 卷

四月一九日（五月一四日）択捉島風鈴別に上陸 二五日大雪 二六日 防衛体制準備進む 二七日二八日二九日五月一日（五月二五日）風雨あり 二日 海岸の陣地視察 四日 山上の陣営に移転 風鈴別の防備状況の記載 露艦との連絡方法 五日 降雪 六日 対寒策の煙の被害 木炭の効果 七日 好天 五月八日（六月一日）オムシャ 一二日 要助から昨年の露寇やアイヌの状況を聞く 一三日 追戸へ行く 一四日 異国船見える 一七日 野都魯の陣屋視察 二七日 択捉島の記述 二八日 追戸の防備視察 六月一日（六月二四日）好天 六月八日（七月一日）蝦夷 一六日 蝦夷改俗の記述 一八日 消息着 二一日 熊害 二七日 江戸の消息着 閏六月一日（七月二三日）一五日離島の準備 三日和船と異なる形態の船発見 戦闘になれば離島不可能になると、凍死の心配をする 閏六月九日（八月一日）一二日 帰還船到着 一三日 アイヌと別離の宴 一五日 風鈴別出帆 一八日 国後島泊館着 一九日 九月末には海が氷るので、それ以前に仙台藩の隊士を帰還させ、その殿をして箱館に帰れとの指令を受ける 二四日 ケラムイ岬へ 二五日 箱館行きの装備を船に積む 二九日 仙台藩の隊士の苦況の記述 七月一日（八月二二日） 三日イケマ採集 四日 江戸よりの消息 江戸で蝦夷地警備隊全滅の風評ありと 五日 仙台藩士を野付に送る 七日七夕 七月一〇日（九月一日）国後島仙台藩の備頭高野氏対面 二二日 風の為仙台隊を残して出帆 二三日 泊に吹き戻される

## 下 卷

七月二四日（九月一五日）国後島泊再上陸 二五日 逆風風待ち 二六日 強風のため、風待ち 二七日 出帆 根室海峡（北海道根室地方）根室 二八日 強風 二九日 風連 安根別 八月一日（九月二〇日）野保邊禮別 二日（釧路地方）厚岸 三日 昆布盛 四日 釧路 五日 白糠 六日 尺別 七日 雨 八日（十勝地方）尾笈内 九日 東武夫 八月一日（一〇月一日）広尾 一二日 曇 一三日（日高地方）サル、一四日 幌泉 一五日 雨 綱引 一六日 様似 一七日 浦河 一八日 三石 一九日 新冠 二〇日 佐留 二一日 滞在 二二日（胆振地方）湧払 二三日 白老 二四日 幌別 二五日 室蘭 二六日 有珠 二七日（渡島地方）長萬部 二八日 滞在 二九日 山越内 三〇日 鷺木 九月一日（一〇月二〇日）大野 二日 箱館着 三日 四日 五日 六日 七日 八日 九日 一〇日 一一日 一二日 九月一三日（一二月一日） 当別 一四日 一五 津軽海峡（青森県）佐井 一六日 一七日 一八日 一九日 異国澗 二〇日 田名部 二一日 横浜 二二日 野辺地 二三日 七戸 二四日（岩手県）五戸 二五 沼宮内 二六日 盛岡 二九日 花巻 一〇月一

日（二月一八日）水沢 二日（宮城県）有壁 三日 古川 四日 仙台 五日 大川原 六日 白石 七日 本宮 八日 九日（栃木県）  
芦野 一〇日 作山 一日 宇都宮 二日 小山 一日 一四（二月一日）草加 一五日（東京都）千住

## 凡例

マイクロフィルム化された底本と対比させて、読み易くするつもりで稿を起こしたが、本稿ではその対比を省略したので、とくにつぎの点に注意されたい。

底本は片仮名であるが、本稿は平仮名にした。また仮名を漢字にした箇所もある。

一部、改めたり補った部分がある。また傍訓は省略した。

注は本文の後に一括してある。

文化五年辰年四月十九日 夕つかた船より上りて風鈴別の谷陰蝦夷の草小屋にまといして寝ぬ。見馴れぬ木草の茂りたる夫が中にいと白き花のあるを、

誰に来て見よとなるらしこの島に名をだに知らぬ花の咲くらん

夜明て見れば花にてはなく雪の氷れるなり。時に知らんとか日の本より簾に入れて持ちたりける鶏の鳴きて夜の明け行けば鶯も鳴きぬ。雪いと深し。ここかしこ見歩き

春秋もありと知られぬこの島に何時と定めて鶯の鳴く

住む人の言葉通わぬ島なれど鶯の音は悲しかりけり

言喧くこの島人も鶯の鳴く声のみは哀しとや聞く

わが国の内と聞きしを唐松の立てるを見れば疑われつつ

四、五日居りける内に仙台の人々の船も大方着きぬ。この人々も皆仮りの萱屋に居り辰悦丸千六百石余と云う大船ただ一艘留め置きて我が君の乗り給いし公船昌徳丸千二百石を始め皆箱館へ

帰しやり留めし船大事あらば海底に沈めん用意せり。さて彼の家の人々地の理によりて山の上に陣営建てんとす。この設け用意ありければ舟より運びて夜を昼になして時の間も懈らず島人らは切り倒したる木運びとる業のみ済めり。この島に着きて船酔は醒めたれどいと悪き匂いの堪え難さにおさおさ物もたうへ侍らぬ心地例ならずして何事もえ留めず。

二十五日 雪いたう。

二十六日 天気よし。海頭に出でて山の方を見れば仙台家の陣営いみじく建連ねて専ら軍たての設けす。

二十七日 天気よし。

二十八日 終日小雨降る。

二十九日 今日も。

五月一日 今日も雨降る。風さへ添ぬれば垂れ込めて居り。

久方の天つ空より故郷の道は遠くもなるやしぬらむ

敷妙の枕の下に湧く水の侘しき音も聞き馴れにけり

二日 天気よし。海岸の陣見に行く。夕さり又雨降る。昨日今日も山々は皆雪なり。

三日 今日も。

四日 天気よし。山上の陣営に移り給う。仙台家の人々は疾く移りて用意備わりぬと聞へ上げぬ。風鈴別の兩岸あまた所大筒の設け迄整い侍れば今は赤人の船待つのみなり。さてこの島に船寄すべき所は斯耶奈と太牟湊門夷と志倍斗呂とこの三所成るべし。もしこの湊に来らばこの風鈴別にありて待つと云う事を彼の国へ捕えられたる二人のおのこに五郎治左兵衛案内せよと高札に認めて建おく。かくて日爰に軍の調練せり。玉の音山彦に応え矢叫びの声耳に絶ゆる間もなし。

五日 雪降る。

六日 曇り。山々は雪いとう降る気色にて見えず。この島の慣にて夜昼焼火す。況いて山の上の新宮なれば寒さ堪え難うしてことに多かり。その煙に当たりて人皆眼腫れ塞たかり痛みぬれば何の用も整わず。かくては一日も堪え難しと賢しき下部に炭を焼かせて煙を避きたれば四、五日ありて皆よくなりぬ。程々に禄給えりけり。

七日 天気よし。

八日 天気今日もよし。人々目の煩いなくなりぬれば又己がじし得物取出だてその業す。島人に御酒給わんとここに居る限り男も女も集めたれば二百人に余れり。陣の前の芝生に坐しておほみき賜ふ。かかる島にもなお礼儀ありて哀れにをかし。いたく酔うて後歌い舞う。

その様は怪しきものの然すがに見ゆる心のうちぞ悲しき

小雨降り出たるも知らず日の暮たるも厭わず誠に怪しき事の限りなりける。

九日 天気よし。日暮れて雨降る。

十日 今日も。

十一日 例の已ばかり晴れたり。

十二日 雨降り風烈し午に風風ぐ。されど雲霧いと深し。去年の夏斯邪奈の役館を守り居りたる下司の要助は通辞をも兼ねたり。御前に召す。こは赤人<sup>②</sup>の來りし時の騒ぎ委曲に問わせ給わんためなり。さて語らくその日怪しき大船二艘來たりて打掛くる玉雨よりも繁し。人々思ひかけぬ事なれば驚き騒ぎ侍れど寇防ぐ料に設けありし石火矢打ち出だしたり。浪も砕け船も粉にならんと悦びあい侍るに船には中らずして浪の底に打ち込みたり。されど音にのみも怖れけむ沖を指して逃げ去りぬ。今はと人々静まりぬるを夜になりて又寄せぬ。命と頼みし大筒は打ち外したり。今は防ぐ力なしと悔しくも皆逃れ隠れぬ。僅かに踏み止まりて誰かれは物し侍りしが果々は己か向股に玉の中りしかば草の中に斃れ臥し物も覚えずなりぬ。いかがして辛き命は助かりけん。箱館に至りて玉の疵は癒り侍りぬ。後に聞かば役館に有りとある限り船に積みて彼の二人の男子迄搦め取り御館焼払いけり。さる中に訝しきは赤人二人この島に残り居りたるなりけり。この二人を殺さずして今日召し問わせ給わば事の由知ろしめさん物をむくつけき蝦夷人<sup>利喜主介</sup>と云えるがかく寇せしをいたく怒り無下に打ち殺し侍りとのよし早う公に聞へ上げたりとなん夫が持たりし筒は己れも先頃見侍りしがその造りさま聊か異にして良や悪しや欠けたる所もありて知り難し。この序に語らく。島人等は神仏も知らず文字もなく年月の界もなし。誰は彼より先に是は夫より後にしてこの岸も崩れずして有りしなど言いて己か年をさえ知らず。貴もなく賤もなく渡らい種もなく、魚はとりて喰い、水は手して呑む。さりけれど唯酒と煙草は上なき宝にて吾国の賜なりと元より知れるも哀れなり。

十三日 今日の如く海原静かなる日も稀なりとてず<sup>③</sup>あいと云う小舟に乗りて磯伝い行く。海岸の景色繪にも写し難き所なりけり。知耶良里四部と和多羅伊安万六辺と云える滝の岩角流れ落つる浪の中にいと高く欹てる巖あり。そこに白き鳥の群居て巢かけたると言葉には及ばねと

蝦夷が着るあつしの衣晒すかと見れば岩角落つる水なり

岩の上に羽うち並べ居る鳥はさながら雪と見へ渡りけり

進見と云う所に着く。爰に役舎あり。入りて昼餉たふ。ここの島人に酒給えり。夫果て山路を帰り給う。海も山も類いなく面白き所なれば渚に降りて遊ぶ。佐藤英明は浪間の海豹撃たんと火打払いて向いおるほど例の舟とも磯伝いで来。日も闌けたり。嶮しき山路覚束無しと又其の舟に乗りてもと見し海頭を帰りて

同じくは磯度も見て海山の変わる景色を人に語らん

日暮れて帰りぬ。

十四日 天気よし。風吹く。共に箱館を出たる仙台家の船沖にて皆ちりじりに成りたるが悪き塩風に逢いて今日着くもありけり。調度迄浪に打ち入りたりと云う。皆懲りし浪路なれば思いやるも侘し。夕つ方海の上守る遠見の者異国の船なり。遠しとてゆめな懈り給ひそと云う。みな用意して夜もすがら待ちしかど汐にや流されけん。又見えずなりぬ。

十五日 小雨降りて例の已ばかり晴たり。始めて咲きたりとして桜の花を人の見せければ色も香も同じ桜の花なれば時し変われば見つつ惑いぬ

道にして過ぐせし春を今更に思い出でよと花の咲くらん

十六日 天気よし。中西佐藤山に入りて猟す。日暮し帰りて鳥ふたつ得たり。黒川野呂神尾は海原に遊びて釣す。魚色々参らす。道にありとて梅花土筆など送る。

年毎に遅れて咲くか知らねども今年は心ありと思わん

つくずくと心をとめて打ち見れば時ならねども春めきにけり

野呂ぬしへ

いとせめて咲ける桜の一枝に籠もりて見ゆる春の色かな

都て此の島の木は烈しき汐風に吹閉じられ延びかねたり。

十七日 天気よし。野都魯と云う所へ陣場見に行き給う。さる備は仙台家の人々いみじく物して事多かれば記さず。桜花はた草々の花多く取りて帰る。人々珍しければ故郷へやらんとす。己も

えとろふの野都魯が崎の桜花色変わるとも家苞にせん

早川ぬしの館出来けりと今日移れり。耶斯奈より島人来ちり鴛鴦に似たると美しき鳥二つ<sup>④</sup> 善知鳥と云 色々の魚奉りて此の度の寿ぎす。

十八日

十九日 天気よし。遠見番<sup>長松</sup>釣して麻無保鳥と云う魚を得たり。之が語る河豚に似て鮫の色なり。長さ七尺に余り幅四尺に越ゆ。いと不束なる魚なり。毒にやあらん薬にや知る人なし。されど清らなれば己も喰たり。味鳥賊に等しくて軽し。又の日聞かば浮き木と云う物にていみじき功能有る物なりとぞ。皆島人喰い尽くして求むれど甲斐なし。又或日薬師中村寿琢釣して胡津古と云う魚を得たり。大きさ四尺計りにて黒き物なり。或人海鯨と云

いしも悪しからず。

二十日 今日も夕暮れいと淋しきに時鳥の鳴くを聞きて

あな嬉しあな面白し郭公都へ早く帰れとぞ啼く

二十一日 今日も朝より海辺に行きて日暮に帰り給う。海山の艶なる景色はいつもあれど英明が彼の鳥得たるこそ目覚る業なりしか。立来る浪に浮べるも高き巖に居たるも吾示すまにまに打つも外さざりけるは折からの興のみに非ず。数多の人の見る所なれば世の聞こえ迄悪しからずと返す返す愛で給いおほみき取でて禄給えり。

いたずらに來て帰るとも君か名は語り継ぐらん蝦夷の島人

浪上に浮きたる事も消えずして残るは人の勲なりけり

二十二日 曇り。此の島に渡り給いて後公の御事なれど、近藤主が労多かる謝し給わんと主し給えり。黒川野呂神尾ぬし等も來りて自ずから盃の数も重なり、誰かれも酔い臥しぬ。近藤主は堪えかねて逃げ去りたれど猶果つべうも非ざりけり。用なき人迄引出さるる程なれば深き奥はさる事ながら果いかあらん。殊にも此の島の核にて等甲斐なき独言に

愚かなる我が心にて見る時は量りなきかと疑われつつ

と呟くめり。聞へやしたりけん下部に至る迄起きて出し給いて止められたり。

二十三日 天気よし。

二十四日 終日雨降る。

二十五日 今日も。

二十六日 曇。午より晴たり。

二十七日 天気よし。いさゝか暇ありて物書くついでありて此の島の事ども聊かばかり記す。周廻は二百五十里と云えど東西に流れたる島にて南北はいと狭しと見ゆ。されど皆物すごき岩山にて然も樹木生茂りたれば通ふべき道もなし。唯海辺を伝いて川ある所々に住たれば島人の家僅かに千二百軒斗りと聞こゆ。岸高く浪荒ければ船寄せて居るべき湊は彼の高札建てられたる三所と此の風鈴別のみ。貢ぎ物奉る魚獵場番家等建てられたり。十二所となん。其一斯耶奈其二留部知其三志反止呂<sup>出張</sup>其四阿理牟夷其五奈伊保其六追戸<sup>出張</sup>其七陪登干武其八乙夷万宇斯其九馬久興麻以其十有満舞其十一羅禹士其十二風鈴<sup>出張</sup>別なり。猶もあれどいと多し。寄り来る湊は聞へず。此の集える有様余りしき空言にも人の聞え侍るめれば心して洩し侍りぬ。見し人ぞ語るべき。いと高き嶺五つあり。皆雪の消

える時なし。其の一つ安止佐能保里二つに斯斗加津不加留志三つには加武者四古魯四には丹祢母夷五には知里津不なり。海路七十里の東に羅<sup>ワ</sup>胡島あり。夏一度らつこと云う水獸獲りに行く。殊に寒くて木も生たたず、住む人もなし。猶小島は多かれど草のみ生い茂りて用なければ行きて見し人もなし。

二十八日 例の朝霧いまだ晴れねど雨だに降ずば追戸のあたり固め見に行かんと頓に仰せられければ、牧某疾く起きていと珍しき晴なりと云う。吾も出でて見るに霜いたう降りて流れし水も氷れり。庭に出で兎角するほど

時知らぬ咲き出でにける花なれば猶雪なりと思ひける哉

頓て岩崎黒川を始め告げやりたる限り出で来れり。伊達家の某は地の利物し侍れば案内は海辺より岨路分け登りて見れば、茂り合たる草原にてあやしき花の盛りなりけり。そが中に立ち込みたる桜の木汐風に吹き閉じられて草の丈に等しきが花はいとせめて咲満ちたり。遠きこの島に渡らすば春秋の花を一目に見る事も非じと思ふにつけて又思ふ事なきにしも非ず。鳥も色々啼けり。

打ち渡す一目のうちに春秋の花の限りを見つる今日かな

故郷にありてなりせば倦くまでは幾日も爰に居るべきものを

岩浅主は氣息荒うてここに留まれり。しばし休みてなお岨路伝い一里ばかり行く。怪しき木々物旧りて海の眺望ことに面白き所あり。降り居て物喰い酒飲む。

花鳥も吾を哀れと思ふべし饑くなるを知らず来にけり

調度負いたる島人は谷に降りて水を呑み草をとりて喰う。こはこの島人の常にて餉持たらぬなりけり。果もなき海の上なれど故郷の空はかなた等言いて人々詠め居る。さる折しも安登佐能保里と云う山の麓にいと幽なる帆影一つ二つ見ゆ。この島に来る迎の船ならんと聞いて

故郷の便り聞かんと遙かにも沖なる船の待たれけるかな

かく言えどなお遙かなれば甲斐なし。ここを立ちて君言いけらく。岨路も飽には非ねどかなたの峰に登らば又珍らしき事も多かるべし。いざと促し給えど昼餉たうへぬ人々あり。午も過ぎぬればと聞て止めぬ。清水のある所に休みて

流れ来る石間の水の清ければ見る人毎に結びあげつる

又登り又下りて宇恵無津攻志と云う所に至る海山の景色言わんかたなし。目移り心惑いて



吾見しが筆に物すべうも非ず。よき人の日記に譲りて洩しぬ。

道もなき道踏み分けてはるばると来にける山の甲斐はありけり

行き行きて追戸に着きぬ。皆人物喰い酒飲む。ここにて時移れば帰る道に出ぬ。また海辺の岨路五、六町も行けるがとて路てう路ならず。同じ所帰らんも口惜し。水あらば渡り峰あらば登らん。熊の多き島なれば出でもしつへし。もし出でば玉にて打つべし。いざなき道の案内せんと茂き萱原踏み分けて猛に分け入り給わんは勇まぬ人なし。

離れたる蝦夷が島まで来ませれど益荒猛男はいや隠れなし

ひた踏みに踏み分けて峻しき山路を唯一筋に越えたらば一里斗りにして又宇恵無津久志に出でぬ。爰の景色始めにも言しごと限りもなきに安根別と保六宇武呂苦志と呼无弥有牟呂苦志など云える巖の分けても高く聳えたるここかしこより清き水の流れ出でたる草も木も皆花盛りにて郭公も啼き鶯も囀れば四時ひとつに來たる心地す。何時迄も爰に居らまほしく思えど夕さればいと寒し。道も遠ければ岨しき岩角を傳い木の根に縋りて越えぬ。今はかくれんとする所にて

見れど見れど飽かぬ景色の疊れるはうゑんつくしの山路なりけり

此の島のここにし越すは世の中にかかる景色のありと知らんや

猶岨路を傳え辿り行くに胸打つ斗りの峻き九折數多所ありて登る毎に安らえば急ぎて帰りたれど日も暮んとす。風鈴別近くなりて小高き丘の上にいと美しう咲ける桜あり。之家苞にせんと仰せられければそこに行きて折るとて詠る

分け入りて見れば心ぞ惑いける何れの枝を折りて帰らん

暮れぬとて帰る道には急げども心の留まる花の陰かな

手折て来ぬるが梢に物を掛け置きて忘れつれば海岸より立帰りて

よそながら見るだに飽かぬ花なれば帰りこぬとや人の思わん

急ぎたれば御館には遅れぬ。今宵此の島の船統べ扱かう津の国人高田屋嘉兵衛と云える痴れ者箱館より來たれり。船引き入るる騒ぎも聞えざりしをと問ひ伝えれば畏まり聞えあぐ。赤人來たりて物し侍らば海上の通路絶えぬべし。さるべき時江戸への御消息聞へ上ん科に怪しき小舟造り侍り其の試みに健やかなる水主二十人選び乗せて汐にもとられず風にも拘らず浪の中をも潜りつ可く功みなしてはるばるの海上無下に漕ぎ渡れりと云う。あれ怖ろしの仕業や。浪路を陸よりも容易く思はせる男なりけり。此の島に初めて渡りたるも之

か勲なるぞ。されば此の島へ渡る船と言はば皆彼に公け定まりぬとなん。迎への船も今は箱館を出ずらんと云う。人々悦び給えり。

二十九日 天気よし。仙台家の貝役の司例の俄<sup>⑧</sup>煩いにて死にきと聞こゆ。さすがに今宵計りは貝の音も止みぬ。

何処にて果てん命も限りぞと思ひなしては見れど哀しき

三十日 天気よし。

六月一日 今日も。

二日 同じ。風吹く。夜もいたう吹ければ

昼の間は物の音にも紛れしが夜は侘しき山嵐かな

故郷の夢かも知ると寝しものをいや烈しくも吹く嵐哉

三日 天気よし。夜べ留別の方に火高く見へければ寇の来りしにやと驚く。物し侍れど野火なりと告ぐ。夕ざり雨降る。

四日 終日降る。

五日 今日も。

六日 曇り。

七日 同じ。

八日 午過ぎやや晴ぬ。

九日 天気よし。

十日 今日も。朝戸明けて

しとかつぶかろしと云える高嶺より吹き来る風は夏も寒けし

十一日 同じ。

十二日 今日も。

十三日 同じ。別けて此の七、八日は玉の音もいと高く爰にも彼処にも唯此の業のみ。

梓弓手に巻き待ちて赤人の寄する遅しと待たぬ日ぞなき

こは人々若しは山岡君の向かい給いしからひと島に来て此の島人は来じと聞き出で本意なく思う折りなればなり。

十四日 天気よし。

十五日 今日も。

十六日 同し。中島延親と後ろの山に登りて遊ぶ。熊の住める穴を見、鶯の巢も見る。いと小暗き藪中を分ちつつ辛うじて海辺に出でぬれば流れ寄りたる鯨の曝れ骨所々にあり。百草を取り集めんとて怖ろしくはた珍らし。物見歩きていたう疲れ果てたり。案内せし蝦夷人をえそといわずあいと呼ぶなり。すべて蝦夷と云うを恥じればなり。この年頃は村方と云うを悦び侍りその心さえ知られず。またこの恵登呂府島に鬚をも額をも剃りて衣服を改め日本人になりたる二十人ばかりあり。年を定め名をやりてをとな役とせり。されど言語はいまだ知らざりけり。外の島人は之等を新しやもと云う。日本人と云う蝦夷言なり。

十七日 天気よし。

十八日 今日阿斗左能保利の沖中に帆影見ゆ。此の夜の夢に恙なく帰りたりといと鮮やかに

夢としても夢のうちには知らずして嬉しきことの限りなかりき

心に願立てたることありて

心をば何に留めて今日よりぞ思い立てぬる印にはせん

今日遙に見えける船着きぬ。辰成丸と云う。今四、五日この風吹き通さば迎えの船皆来ぬらんと云う。公の御消息もたるは觀厚丸と云船なりと聞きて殊にもこの船待たれつつ

故郷にありては疎き大かたの人の上さえいかたとぞ思う

十九日 曇り。雨もいささか降れり。

二十日 今日も。

思いやる我が故郷はいかばかり海と山との彼方なるらん

二十一日 天気よし。追戸へ遊ばんとて船人一人熊にとられけりと罵る。松灯して人多く行く。

時ならば命はさてもあるべきを確かに見えぬ果ぞ悲しき

ことに今夜は去年の冬身罷りし姉の君の忌日なりければ思ひ出して物侘しき折なればいと哀れも深く思いやられ侍り。雨も降りきぬ。

その人の故郷人の心にもなりて今宵は袖濡らしつる

二十二日 曇りて風吹く。

二十三日 天気よし。風も。寅成丸着く。

二十四日 今日もよし。されどいと寒く霜深し。

二十五日 天気よし。風吹く。日暮より雨になりて風いと烈し。

二十六日 天気よし。風吹く。午より聊か夏めき侍り。

二十七日 天気よし。観厚丸着きぬ。江戸の御消息着く。皆人のもあり。吾が兄人の君の消息を見れば故郷に居ますかの父君は更なり。都の親族江戸の同胞に至る迄皆恙なし。限りなく嬉くて

待し甲斐ありし便りの嬉しさに今日のみ憂さを忘れつるかな  
妹より返事やり序でに

恙なくありと計りは故郷へ折々告げよ吾に代わりて

今日聊か夏の心持し侍りければと計り<sup>⑩</sup>拾を着たり

時ならぬ衣返して今日計り夏になりぬと思ひけるかな

兎角する程又寒くなりぬ。

二十八日 曇りて風吹く。未より雨降る。夜も。

二十九日 天気よし。申より例の雪雨になりぬ。岩浅早川来りてこの島を立たせ給うべしと内々示し合する事どもありけり。

后六月一日 雨降る。午より止みしかど例の霧晴れ難にす。垂簾めて居り。

惜しからぬ月日と思へと徒に明し暮らすも心なき哉

十五日を限りとして此の島立たんとなり。皆其の用意す。

手を折りて見れば臆てと思えども待つは一日も久しかりけり

二日 曇り。未計り晴れたり。迎えの船驚き侍らんと玉の音止められたり。

三日 未より雨降る。いと遙かなる沖に帆影見ゆ。赤人の来べき方なりと聞こえ上ぐ。遙かなれど迎の船とは嵩も違ひぬれば見紛うべきに非ずと云う。こは元より待し事ながら今はこし秋の氣に成りては船路覚束なしと一向に帰らん用意する折也。今よき事ありて爰に留まらば戦はなくとも大方凍死しぬべき抔聞きて心は儚き物なれば驚かぬ人なし。斯れば海の上をのみ打ち守り居て

君か代の外なる海の上なればいかなる浪の立つも知られず

と思へば更に安からず。又参りて聞ゆ。帆影彌近くなり侍るが、赤人にはあらで迎えの御船の汐にとられて流れしが帰り来るならんと云う

待々し迎の船と聞く時は見えみ隠れみするが侘しき

四日 夜の内より雨降り、朝晴れて午より止み、夏めきたり。船又一艘着く。

五日 天気よし。終日風吹きて寒さ堪え難し。

六日 今日と同じ。江戸へ御消息聞へ上げ給う。人皆やる。己も妹がりやる消息の奥に

あとはかみなき世の人の空言を聞きてはかなき物な思いそ

立ち帰るほとは近くぞ成りにける今日より手をば折らば折りなん

此の頃江戸にては難風に逢いて船も人もなくなりぬとも言ひ、又寇に責められて皆死にきとも言あへりとて爰には生きる心地もし侍らずと告こしたればなり。

七日 天気よし。立の騒にて暇無し。

八日 今日も子規のいたう鳴くを聞きて

行きしとも帰らん山もここなれば折り延えてのみ啼く郭公

九日 天気よし。

十日 同し。

故郷の事語りては暮らしける立つ日の近く成るにつけても

十一日 天気よし。奈良保と云う所へも船着きたりと告ぐ。又沖にも帆影見ゆ。寝し夜の夢に

故郷の事を清かに見し夢の覚めし夜半こそ悲しかりけれ

十二日 天気よし。乗り給う料とて公の御船吉祥丸着きぬ。夕さり海辺又騒がし。

今も又迎えの船の着きぬらし湊入りする声の聞こゆる

やがて見えすれば厚徳丸と云う船引き入るる騒ぎ也けり。

十三日 小雨降る。午に止る。波よしとて調度とも御船にやる。立たせ給う祝いの御酒島人等に給う。例の集いていたく酔えり。男も女も唄い舞う。

足の踏む所も知らずなる迄に酔いたる見れば哀れなりけり

かく計りあやしき事の限りにも思う心は見えもする哉

伊達家の人々来りて暇無し。

十四日 雨いささか計り降る。午に晴れたり。又彼の家の人々物司なるは皆出て島人らは別れを惜しみ奉り色々の魚鳥心の限り捧げて此の島捨て給わずば又渡り給わん事を願いて陣営のあたり去り難にす。哀れなる事ども多かれど例の蝦夷言葉なれば暇無きに洩しつ。

十五日 雨降る。辰ひとつ計り船に乗らんと人々促せと簑笠迄船にやりたればいざよう。己過ぎる頃晴れたり。頓て出ず。海岸に在りて仙台家の人々山上の陣より弓筒の頭一備ずつ下り来たるを見れば皆法ありて訓練せし姿表れて備えは船に乗りても猶乱さざりけり。其の家の風さへ見えて目覚むる心地す。吉祥丸<sup>七百石</sup>を始め辰悦丸<sup>千六百石</sup>水主<sup>二百六十石</sup>定宝丸<sup>千二百七十石</sup>水主<sup>十七石</sup>宝寿丸<sup>千五百石</sup>水主<sup>十五石</sup>寅成丸<sup>千二百石</sup>水主<sup>十五石</sup>辰成丸<sup>五百九十石</sup>水主<sup>十四石</sup>厚徳丸<sup>九百五十石</sup>水主<sup>十六石</sup>と云う。船とも敵う船艤して家々の印眩き迄浦風に打ち靡きたり。此の外に山王丸<sup>八百五十石</sup>金昆羅丸<sup>八百石</sup>安泰丸<sup>六百五十石</sup>此の三艘は同じ日箱館を出でたれどいかが成りつらん今日迄帆影も見えず。偕此の海岸の景色を見れば今はた心たけく成りて赤人の船海を塞ぎて寄せ来たるともやをら何斗りの事かあらん杯言うも空言ならず。陸の方を見やれば島人猶彼処に集いて御舟を慕い泣居りたり。皆人袖を濡らす。湊に日暮迄居れど風なし。沖には追手吹くとして二十町ばかり端船にて引く。今は彼の野都呂の崎をも離れんと思う頃いとよき追手なりとて船毎に帆引上げたり。折しも月後ろの峯に仄めく。

湊迄満ち来る潮の時待ちて月と共ににも出でにける哉

月影と共に出でにし船なれば山をも越えて今宵行くなむ

十六日 聊か曇りたれど夜も日も追手にて危き海路は大方渡りて辰過ぐる頃久南斯里島近くなりぬ。外の船は此の島の登麻利へ行かんと西へ向かう。いつか安登左能保利も後に隠れて久南斯里の知也知也能保利の麓に出でぬ。今は雪も大方消えて春見し気色にも非ず等言えり。

さして行く船路をのみ祈りつつ山さへ今日は見る心なし

十七日 天気よし。風は追手なれば瀬関と云う所の沖に來れば例の鯨殊に多かり。乗りたる船よりも大なるがいと近く寄る。船人舟端を叩けば頓底に沈みぬ。斯せねば船を返すとなり。能天登と云う所迄来て風悪しければ沖中に繋れり。

十八日 天気よし。已斗り迎えの船出で来て登麻利の御館に着く。爰の事も例のいとも繁ければ省きつ。此の島の警固も仙台家の人々なり。備の頭高野某<sup>②</sup>を始め八百七十五人とぞ聞えし。

十九日 霧深く立ち込めて雨降り風終日。仙台の人々来りて暇なし。風鈴別より此の登麻利迄危き船路九十里余り来にけり。世の常の旅にて侍らば故郷も近くなりぬべし。いともいとも遠き旅哉と皆人侘ぶ。同じ心を、

はるばると帰り来たれど故郷は夢より外に見る由もなし  
されどまた、

遠しとも知らで来ぬるは追手吹く風に任せし船路なりけり

この島も九月末より海上氷りて船の往來絶えぬと成なん。かかれば陣にある仙台の人々を海の氷らぬうちに立たせて陸地をやり其の殿りして箱館迄帰れと更に公の御事ありけり。彼の人々猶外の人々も加われれば稍千人斗りなり。蝦夷地なれば頓にもはてず。日毎に別ちて打ち立たせぬれば夫の果に迄又爰に止り給えり。唯立ち寄りて見る斗りならんと思ひしを斯と聞きて皆人詫ぶ。

吾ためにありけるものを悔しくもとまりと知らで船寄せにけり

二十日 雨降り風吹く。侘しさいはん方なし。

久方の空さへ見えず成りぬれば雨の降る日は悲しかりけり

涙にも雨にも朽ちて旅衣袖も袂も皆破れにけり

二十一日 今日と同じ。午よりやや晴れぬ。

二十二日 曇り。例の霧雨に増されり。

二十三日 今日も又降る。此の陣屋は海面にて打ち開きたれど秋の仕業にや霧ことに深くして昼も小暗し。螢を人の見せければ、

照らす日の光小暗き島なれば昼も螢の影頼ままし

二十四日 天気よし。化良尤威と云う所へ行く。調度は船、人は歩行海辺を伝い天理伎禹仕と云う所の番屋に至る。爰にも鮭鱒など大釜を多く海辺に設けて煮る。綱引きせさせて種々の魚いと多く得たり。物したる島人らに迄給えり。化良尤威にても綱引して得たる魚又多し。岡越えの道を帰るに水上さして流るる川あり。人人あやしと行きて見れば群がりたる鱒の海より山に登るなりけり。斯して果果は水なき所迄も至りて終ると成なん。日暮れなんとするに仙台家の陣陣見回わりて帰えり給いぬ。

二十五日 例の霧いと深し。辰満る斗りないふる。箱館迄やる調度ども船に積む。

二十六日 今日と同じ。暇無し。

二十七日 朝より珍しう晴れたり。今は赤人の憂いもなくなれば物に加筆けたる題を見て詠みける歌

紅葉

黄葉の風に任せて散る見れば秋は止らぬものにありける  
海路

真帆上げて門渡る船の通路は風のまにまに変わり行くらん  
橘

我が宿の花橘は散りにけり山郭公待つとせしまに  
後朝恋

徒に待ち明かしたる時よりも別れし今朝は悲しかりけり  
片思い

吾が思う心の深くなるままにいやつれなくも見ゆる君かな  
又

思わぬを思うにつけて世間の住み憂き迄に成りにける哉  
旅

心まで変わるものとも知らずして遠き旅路に出でぞ立ちぬる  
尚も此の頃詠みたれど事多かれれば記さず。

二十八日 夜より雨にて終日晴れず。

久方の天つ美空も旅なれや涙と見えて雨の降るらん

二十九日 天気よし。久宝丸出でぬ。此の船には仙台の人人病み臥せるがいと重くて陸地の方より七十人余り乗れり。漕ぎ出でんとするに死にきとて箱めく物に入りて上るもあり。見るに耐えずして、

斯としも知らで待つらん故郷の人の上こそ思いやられるれ  
猶も心に余りて同じ事ながら、

故郷に今日か翌日かと待つ人のうえいかばかり悲しかるらん  
後ろの岡に馬場あり。乗て日毎に遊ぶ。そこに新らしき奥つ城多かり。こは此の島に來りし人日毎に三、四人死なぬ日もなしと。今日も其の業見れば箱ながら埋むとて某と書きたる木に月日のみぞ記したる。寺もなく法師もなければ誦經する人もなし。明日は誰が上ならんと互いに袖濡らす。

劍太刀腰にとり佩き故郷を出でたる人の果ならんやは  
果なくも人の上とぞ思いける吾が行かん日を何時と知らずて



三十日 終日風吹き雨降る。夜もすがら同じ。

六月の限りとしれど旅なれば夏の祓えをする人もなし

一とせの半ばも越えて來たれども限り知られぬ旅にもある哉

七月一日 曇りて風吹く。いと侘しくて、

つくつくと思ひ出ずれば久の浜越えて久しく成りにける哉

垢つきし衣其のまま重ね着て憂き事繁く思ふ旅哉

二月 同し。

帰る日は何時か知らねど棚機の逢う夜待つ毎待たれぬる哉

三日 天気よし。いと寒し。いけま<sup>⑭</sup>と云う葉取らんと山深く行く。霧いと深くてしととに濡れぬ

斯ばかり露の置け葉ぞ吹き渡る此の朝風の身には泌むらん

住み荒らしたる草の庵に入りて餉ひたうへ手にて水呑む。道もなき岨路谷陰二里斗り別け入りていけま多かり。掘り取らんとすれど虻と云う虫手にも顔にもいとう縋りて刺すが煩わしくてさのみはえとらず。

道もなき小篠たか萱ふみ別けて苦しき山の奥に來にけり

と今更言うも帰りかねたればなり。

四日 天気よし。稻荷丸着きて江戸の御消息捧ぐ。吾が文ともあり。取り敢ず開き見て、

故郷の便りを聞くは爰にして思いやりしに変わらざりけり

はやう言遣りし事えとろふ島へ向いたる人人は戦まけて皆死にきとも或いは船沈みて行方もなし等あとはかもなき事のみ言い騒ぐなりけり。

五日 天気よし。船二艘出でたり。仙台の人人を乗せて野村に送るなり。

六日 曇り。季昌丸出でぬ。箱館へ行くなり。江差より村上君の御消息あり。初め六月十

五日彼の所は出でたるなり。申ばかり箱館より來ぬとて加徳丸通達丸着く。小菅君大島君のみ消息あり。神一つ二つ鳴る。日暮れより雨いささか降る。

棚機は去年の今日より待ちつけていかに嬉しき今宵なるらん

願ふ事心にあれど旅なれば棚機つ女にかす物もなし

八日 天気よし。季昌丸福吉丸ともに出ず。之れも仙台の人々乗りて箱館迄歸る也。

吾が船も船装いはしたれども何時此の島を出でて行べき

朝風に漕出でて行く船見れば羨ましくもなりまさる哉

九日 昼より雨降る風吹く。終日同じ。

十日 曇り。仙台家の臣此の島の備頭高基雅樂参る。対面して帰し玉えり。申とつ計り震る。終宵ら雨降る。

十一日 天気よし。風吹きていと寒し。

十二日 天気よし。いと静かにしてよし。二百十日なれど祝ふ里もなし。

十三日 天気よし。風吹く。

十四日 曇り。已過ぎて晴れたり。

十五日 曇り。仙台家の人数多乘りて昌徳丸朝風に真帆上げて出でたり。羨みて人人まもり居り。朝風の吹くと見るまにとまり船行衛もしらずなりにける哉  
昼になりて雨降り風吹くと、

夜もすがら夢の結ばで故郷をうち忍べとや雨の降るらん

十六日 雨風いや烈し。帰る事のみ語り続けてまとい侍れば、

帰り行く時侍ときはいたずらに過る月日も嬉しかりけり

十七日 朝霧晴れたり。沖にあやしき船の帆陰二つ三つ見ゆ。この島には寄らで何地か行けり。ともすればあるものなりとぞ。

十八日 天気よし。千鶴丸着く。

十九日 雨降る。

二十日 今日も降れど立の騒にして暇無し。

二十一日 天気よし。千鶴丸出でぬ。わが乗る船も明日出でんと云わば調度とも皆積む。  
日暮れより雨降る。船出いかあらんと人人寝もせで、

一日だに恋しきものを徒にみそいかまで暮らしける哉

ぬば玉の今宵は寝ても明かすべかし明日も出でずばいかに暮さん  
など云い合えり。

二十二日 天気よし。風よからず沖出です。

いつしかと待ちにしよりも中中に今日の一日は苦しかりけり  
船人参りて聞こゆ仙台の人人は野付迄至れり。君は根諸迄行き玉ふめればかたも違いて侍り。同じ風にて渡り難し。仙台家の人々はなほこの島に残るとも先根諸迄わたり玉いなん

や。さらばこの風にて御船出ださんと云いとまりは立ちぬ。船の上の事なればとて夫が云うになりぬ。

二十三日 天気よし。船より羅禹士山を見て、

朝な朝な目なれ目なれて見し山もさらに別れの惜しからぬ哉

二、三里来て風なく、

帰らんとする心を帆にあげて追手の風を折りける哉

されど風向いより烈しく吹ぬれば悔しくも又とまりに帰りぬ。

## 注

一 唐松 松浦武四郎の『三航蝦夷日誌』の巻之七に「落葉松 和名蝦夷松 夷語グイ」とある。(吉田武、二一―四百三十八頁)

二 『休明光記』八に次の記述がある。(寺澤、他、二百十四―二百十五頁)

一 エトロフ詰の面々は一旦クナシリ嶋へ引き取りたるよしにて、エトロフ争亂の次第をあらましに取しらべ、關谷茂八郎より申し越しおもむきは、その節支配人陽助鐵火包にて内股を打たれ、津輕家の足輕一人足の甲を打たれたれども、いづれも薄手のよし、外に名の知れざるものも即死二人あり。一人は石火矢臺の際に倒れ、面鉢こげて分らず、石火矢の發したる時怪我したるにてもあるべきや、一人は岩穴の内に倒れ、敵の鐵火包にあたりたるやにも見え、兩人共衣服の襟を見れば、漁業稼方のものにもあるべしと思はるれど、その事頭取たる者かの嶋を逃げ去りしにより確と知れたし。又アريمイといふ所の蝦夷一人、シヤナ川向にて鐵火包にあたり死たり、敵の方にてはヲロシヤ人三人、シヤナ會所へ上陸の時打倒し、その外三十四人も打しと覺へたれば確と見留ざるよし。又シヤナ會所焼跡にてヲロシヤ人一人、酒に酔ひ夷人に對し我俣をふるまひ、夷人共集り、五月三日の夕に打殺したるよし、また會所番人行十郎といふ者、五月三日夕異國船出帆後、夷人を連れアريمイといふ所の夷小屋へ立寄たるに、夷人の妹と外に一人の夷人居たるゆへ、辨當をつかはんとて内へ入れ、召連れたる夷人兩人はシヤナ會所の跡を見せに遣はし、飯を喫し居たる所へ、ヲロシヤ人一人鐵炮を携へ來りしにより、かの男女の夷人は仰天して逃げ去り、行十郎も外へ出て、キナといふ草の陰に忍び居て見れば、彼のヲロシヤ人は、行十郎が喰ひかけたる飯を喰ひ、所々を見廻し、やがて行十郎が忍び居たるを見つけ、その前へきたり、頭より肩先へ撫おろし、手を取り出し、爐邊へ連れ行き、何やらん咄し、アメリカ何々とひいて、指を四ツ折、ウルツプにボロン／＼などいひけれども、言語分らず、暫く過ぎて寝る真似をし、行十郎にも寝よといふ仕形するゆへ、ヲロシヤ人の側に寝轉びたるに、やがて行十郎が傍に置きたる脇差に手を懸けしゆへ、取り隠しなどする内、最前シヤナへ遣したる二人の夷人も歸りきたり、その夜は四人とも同宿す。行十郎はこのヲロシヤ人を生捕りにせばやと思ひ居たる所に、追々外の夷人ども大勢集り、是非打殺すべきとひしめき、いかに制すれども聞き入れず、たとへ召捕りたりとも夷人ども大勢にてとても助くべき勢ひにあらざるゆえ、今は是非なしとて、行十郎脇差を以てヲロシヤ人の胸を差通し、夷人ども寄合打殺したるよし。このヲロシヤ人兩人の衣類鐵火包或は藁袋頭巾等箱館へ来る、後に攝津守正敦朝臣も見給ひ、江府へは繪圖に寫これをあぐる、

三 図合(づあい)船 松浦武四郎の『初航蝦夷日誌』の凡例の方言に、「七十石より九十五石迄之船を云也。此船近場所通ひニ多く

用ゆ」とある。(吉田武、二―上―三十六頁) また、武四郎は『東奥沿海日誌』、青森湊、十二日の項に、「大橋 川幅凡四十餘間。川深くして圖合船ハ皆此處迄入來ル」とある。(吉田東、百九十四頁)

#### 四 一般にエトピリカとされている。

跡狭山の項に「水路志」を引用した次の記載がある。これはエトピリカ(鵜)の群棲する場所と云う意味の地名の説明の記載にあたり間違えたものである。(吉田東、三百七十一頁)

…「イト」と称する海鳥、群を成して棲息す。依て「イトピリカオイ」「イト」は鵜、「ピリカ」に棲む、「オイ」は多き意)の名あり。

『三航蝦夷日誌』卷之七につぎの記載がある。(吉田武、二―下―四百三十七頁、図、同、四百三十七頁)

エトピリカ。訳而贅美敷て云義なるべし

其形大小鴨のごとし。色薄黒く背直黒にして首ニ長き薄黒き毛有。鰭は紅色にして至而見事なるもの也。姿は次ニ図することし

武四郎は、また『東奥沿海日誌』の青森湊の項、安方町の善知鳥宮について、種々考察している。その一部に「又エトロトフ鳥有。エトピリカにてハなきや。後者を待」としている。(吉田武、千百九十二―百九十四頁)

『休明光記 六』にラシヨワ島人の服装について、次の記述がある。(寺澤、他、百七十一頁)

…上着は鳥の皮を縫合せ、此鳥は、エトヒリカといひて、頭に白き立毛あり、總身は黒く嘴と足は赤く、鴨程の水鳥にて、エトロフにも見えたり、毛の方を内にして皮裏を表へ出し、そのくちばしを二つに割り、五十六寸より壹尺六十七寸程にあみて襟元へ縫附け後ろへさげ、裾には黒白の犬の皮へかの嘴を取添縫附、下着は白緋紺木綿の筒袖胴着、同じ皮の杓をはき…(吉田東、三百六十八―三百六十九頁)

また、『三航蝦夷日誌』嘉永二年五月廿七日の項、ルベツ(留別)付近の記述につぎのものがある。(吉田武、二―下―四百三十六頁)

…彼エトピリカが多く来りしとて、則起て見れば海岸二十羽斗も群居けるが、夷人共是を一羽石を投ちて取りけるを、乞得て肉を去りて皮斗を乾して今ニ所持至しける

エトピリカ 本名如何なるよしやしらず。俄羅斯語□□□と云るよし。侏弗加人之忽而此れ一皮を縫合せて着用とす。此鳥より段々奥に至る処此鳥多く住るよし聞り。又此鳥を去りてクナシリへ来れば少しも見ることなし。然れ共馬琴翁の著す処の煮雜の記とか云る書には、津軽外が浜なる善知鳥、佐渡相川の善知鳥の社等皆此鳥をさして云よし書たり。其訳如何なることぞ。尚後説を待の也。

エトピリカ。訳而贅美敷と云義なるべし

其形大小鴨のごとし。色薄黒く背直黒にして首ニ長き薄黒き毛有。鰭は紅色にして至而見事なるもの也。…

#### 五 『再航蝦夷日誌』卷之三(安政三年 一八五六)の伏木戸村の項に次の記載がある。(吉田、二―上―五百四十一―五百四十二頁)

又此村にコッコと云うの冬分によくとるゝ也。此魚、箱館にも有。其魚一向に人の行ことも不知して磯辺ニ寄り来る由。其肉白く皮黒くして形は河豚のごとし。其肉を豆腐と味噌汁に煮る時は、何れが豆腐やらん何れが魚の肉やらん難弁し、其故ニ松前の方言に何に而も其半放がたきものゝ事を、コッコも肴か、田作りも尾頭もの等云こと有。餘滞留の時江差町の妓楼熊石屋某ニ寄宿致せしが、其棲致而貧にして客と云とも一向なかりしが、其門口を所の若ものども悪口至せしニ、コッコも魚か、熊石屋も茶屋かと云て過たるを聞て一笑しぬ。其方言にし而風土をしることさゝ有もの也

## 六 紗那郡別飛村

水路志曰、…○按、別飛は、文化以前に専ナイボといひ、謂はゆる魯人來寇の内浦はこの地とす。

千島疆界考曰、文化四年四月二十三日、前年樺太を浸し、露人ホウストフは、ダビドフと共にナイボに來り、翌年正午、三艘の脚船に、水夫二十人許を載て上陸、直ちに番屋に押入れり、番人等恐惶、或は食を求むる者と為し、食物を供へけるに、ホウストフ等、猝に恐れる体を為し、食器を打碎き、番人五郎次以下五人を擄捕り、縛りて之を本船に送り、夫より倉庫の戸を破り、所貯の諸君物を奪ひて、後火を放て、家屋を残らず焼払ひ、而後本船に帰れり。奪掠せし諸物中、基本船へ積入たる品へ、米二十三俵、木挽鋸三挺、大工道具及大秤一具、古手綿入四襲、白木綿二反、其他番人等所有の衣類、夜具、脇差、鉈、鉞、刺刀等なり、乃港名を「ドープロエ、ナチャロ」と改むるに擬す、着手好(テハジメ ヨシ)といふ義也。(吉田東、三百七十六—三百七十七頁)

右の記載は同書に限られていることである。(鹿能、一三五頁)

## 七

松浦武四郎は『三帆蝦夷日誌』に獬虎として「此魚未だ生るを見たることなし。其皮は松前ニ見たるが水獺の立毛を抜たるがごとし。色も又同じ。其色(毛)上ニ撫とも下ニ撫とも其似になりて至而柔かなるもの也。此水獺松前家に而献上なりしが、近年は絶てなしと。今松前家の馬鬣ニ是を用ゆ」の記載をしている。(吉田武、二一—下四百四十頁)

臘虎島 最上氏赤夷風土記曰、臘虎島一名ウルプ島といふ、安永元年の春、此島へフウレシヤモの大船來る、六十人程上陸し小屋を掛住居、日々臘虎を捕る、エトロフ蝦夷は、初め臘虎皮一枚を木綿の同幅と交易せしが、其価少分なれば交易を止む、…

得撫(ウルプ)島 其北東角ヨリ東北凡ソ五里ニ延伸セル一帯ノ岩脉アリテ数小岩嶋ヲ為セリ是ヲ飛岩岬ト云フ臘虎多シ(多羅尾、八十一頁)

○近藤氏鄂弗加考曰、ウルツプ島、「ウルツプ」と云魚多きに因て名づく、松前人は、此島臘虎島と云へど、蝦夷人の所謂ラツコ島は、別地にして此島の東洋に在り。(下の雷公計島に合考すべし)…當時、特に此を臘虎島とも呼ばれしは、北群の島夷が、獸皮もて此に來会、貿易したればならん。(吉田東、三百八十一頁)

『休明光記』三にウルツプ島のロシア勢力を排除した後、次のようにエトロフ島から偵察を派遣したことが記載されている。(寺澤、他、九十一—九十一頁)

さればとて空嶋にて置べきにもあらねば、先この嶋は年々見廻りの者に、ラツコ獵として、蝦夷人少々差添て渡らしめ、夏より秋までも獵業して、冬はエトロフへ引取て然るべし。冬中は四海氷となれば、外寇の恐もなし。先兩三年の程はその手續に取計ひ、追々の模様により處置有べしと商議一決し、すなはちその趣を以て同年八月廿一日、伊豆守信明朝臣へ申せしに、仔細あらじとの御事にてありければ、翌文化四卯年より、エトロフ詰下役同在住の内一人、並南部津輕勤番足輕之内三十人、通辭番人兩三人、蝦夷人三十人、ラツコ獵兼ラツコ見廻りとして、年々ウルツプ嶋へ渡海する事に成りぬ。

得粒島床丹灣の項(吉田東、三百八十三頁)

蝦夷草紙曰、予、天明丙午の年、エトロフより渡海してウルツプの西浦モシリヤに着船す、此に海苔あり香味共に美し、又海胆多し、臘虎之を好み食ふとぞ、…

武魯頓(プロウトン)島の項(吉田東、三百八十六頁)

近藤氏朱那加考曰、マカナルム島(魯西亜人改名セウセ)此島大さチリボイに同じ、臘虎「トド」あり、木なし、夷人此島へ至れば「エトビリカ」鳥を捉て食料となし、其骨を焼て薪とす、内地の鮭鱒の多きが如し、此島も古來よりエトロフ夷人臘虎漁場也。

八 水腫病か。安政四年(一八五七)、仙台藩医が藩に提出した『青腿牙疳弁』に、「蝦夷地一異疾アリ、腿腫色青、或紫赤ヲ発シ、

肉上頑硬、歩行艱難、齒齲近腐爛、濃血ヲ出シ、甚ハ牙齒脱落、或鰓唇牢潰ニ至ルモアリ、口中ト脚ト一時ニ発スル事勿論ナレドモ、其内ニハ口中ノミ腐爛スルモアリ、脚ノミ紫黒斑ヲ発スルモアリ、又腫痛ノミスルモアリ、形状一様ナラス云々」とある。(多川、解説)

九 挾捉の髻塚、挾促郡にある。帰化の鬚髻を集めて埋めた。文化四年三月函館奉行安芸守羽太正養、石を建て、高き四尺五寸、横一尺三寸。(稲城、二百四十六—二百四十八頁)

『大日本地名辞書』八(吉田東、三百六十八—三百六十九頁)

髻塚は挾促郡に在り、帰化の蝦夷剪る所の鬚髻を聚て斯に埋む。文化四年三月、函館奉行安芸守羽太正養、石を建て之を誌す、高四尺五寸、横一尺三寸。其文曰、惠登呂府島は、東蝦夷地の奥にして、松前を距ること三百里許、其島回りは二百六十里に過ぎ、北極の地を出ること五十度に余り極めて寒し。寛政の頃ほひより、蝦夷が島のことを所置せさせたまひしを、享和二年には筑前守藤原安論と、正養とを其司として、彼千島の事を司らせたまふ。其中に此島は外国に近ければ、衛護最厳なるべしとて、其官吏を選び、初には近藤重蔵守重、山田鯉兵衛嘉充、其次菊地宗内、下司には松田仁三郎、関谷茂八郎、柳権十蔵等、かはるゝ此処を承る。此地は大灘の離島にして、古より船の往来たやすからざるより、爰には住む夷等、衣食の品をはじめ、魚捕る具など備らず、飢寒に迫るもの其れ数をしらず。彼諸官吏是を憂ること切にして、摂津国兵庫の船人、高田屋嘉兵衛と云者は、海路のことに巧なればとて、此人を薦挙て船を遣らしむるに、則水路を考得て、初て大船の往来をしてより、年毎にわたる船たえず、諸の品を運送し、魚捕る具も全く備はりければ、夷等生業の道を得て、始て衣食に足ることをしり、手の舞足の踏を覚え、朝夕遙に本邦の方を望み、其国恩を仰でやまず。抑、此島は外冠の警衛のみにして、苟も国益を謀るべきにあらざりしが、思はざりし地も開け、人も増けるほどに、其国産を出すこと数方に余れり、是天より仁政を助けたまふなるべし。又南部、津軽、両侯の英士、許多遣りて守らせられ、此警衛は爰のみにあらず、蝦夷地の内あまた所に、両家の功績亦大なりと謂ふべし。已に如此内外の所置全備りぬ、かくて夷等其国恩を惶み奉るの余り、髪を被り、衽を左にしたる姿を慚ぢ、皆上国の風俗を願ひ、自ら長き髻を剪、髪を結、男も女も夷の姿なるもの、今や一人もなし。実にや風を移し俗を易ること、彼の諸官吏の功績にて、固より仁政の及ぶ所なり。則剪たる髻を聚て、此碑を建て、髻塚と名けて、其国恩のいちじるしきを不朽に留むるのみ。歌曰、かしこしないまそのときを蝦夷がすむちしまにあまるみよのめぐみは。

(此碑文、漢文を用ひざるは、今後新に本邦より処置する地なれば、総て和文こそあらまほしけれといふ、林大学頭乗衡の意見に従へるなり)

二〇 嘉永二年(一八四九)六月四日、挾促島よりの帰途国後島古釜府に寄港した松浦武四郎は『三航蝦夷日誌』巻之七に「快晴。下る風暑氣少し催したれ共、纔昼比半時斗の間単衣を着し、又ハッ比より給(給)を着しけるニ、今日は終日出日和も無船中鬱陶數暮しけるニ、…」と述べている。(吉田武、二一—下—四百四十七頁)

二一 はしふねか 松浦武四郎の『航蝦夷日誌』の凡例に方言として「船橋を挙げている。その説明は「決船また伝馬船とせり。是は皆弁才ニ持来る船故、其親船の大小に而此橋船も大小有る也。陸への往来ニ用ゆるが故于橋船の名有るもの也」とある。この弁才船も「東西両部とも申し、惣而百石以上の船をして、皆弁才と号るもの也。巻中弁才泊りとするもの皆百石以上の船のかかり潤也」とある。(吉田武、二一—上—三十六—三十七頁)

查、岩崎と岩浅の、また、六月二十九日に岩浅の名がある。これらは、畑山版は岩崎、高倉版は岩浅と同一名になっている。したがって、本来、同一名と思われる。ただし、岩崎か岩浅かを推定する根拠は未見。

三 クナシリの備頭(そなえかしら)は高野知哲であった。因みにエトロフの備頭は日野信清(河北新報社、九十一頁)。上巻卯月一日の項に魁首日野英馬の名が見られる。なお、備頭とは独立駐屯部隊の長官の称。仙台藩の文化五年度の蝦夷地出兵の際には、エトロフ、クナシリ、箱館と三方面それぞれ独立した部隊編成を採用し、それぞれ備頭を配したが、安政度の編成をみると白老元陣屋に備頭を配し、クナシリ、エトロフなどの出張陣屋には武頭(ふかしら)を配するのみで、備頭を配するのみで、備頭は置かなかった。武頭は実戦部隊の長で、若年寄の管下にあつて、先手役を勤め、かつ城門の出入の監察や火防の任に当たる。蝦夷地出張陣屋の長をこのように称した。(多川、解説)

三 上巻二月六日の項に「久ノ濱の海へは、眞砂地にして、三里はかりの道なれば、いたうつかれ果たり。風あれて雪降りきぬ。浪打あけて道をかくせり。行なやみて人々わふ。日くれて富岡につきぬ」とある。

#### 四 イケマ *Cynanchum caudatum* Maxim. かがいも科

『休明光記』一はアイヌの医療行為について、病む事あれども醫療なく、只イケマといふ草の根を採し食ふのみなり」とのべている。(寺澤、他、三十七頁)和人はこのような知識をもとに、イケマを準備したのであろうか。

『三航蝦夷日誌』巻之七にイケマについて「病氣之節多く是を用ゆ」として、「漢名 白免灌(シなし)時珠本艸 白免灌 牛皮消 メコワカンナ救荒本草等の名有べし」との記載がある。(吉田武、二一―四百三十九頁) 図(同、四百三十六頁)

#### 文献

上田萬年・監、一九六七、『国学者伝記集成』、名著刊行会

角川日本地名大事典編纂委員会、『角川日本地名大事典』、角川書店

七、一九八一、福島県

河野常吉・編、一九七九、『北海道史人名字彙』、北海道出版企画センター

河北新報社、一九八二、『宮城県百科事典』、同社

國學院大學 日本文化研究所、平成二年、『和学者総覧』、汲古書院

高倉新一郎・編、一九六九、『日本庶民生活史料集成』四、三十一書房

多川 仲之丞、一九八一、『蝦夷 エトロフ 風土見聞之巻』、ファン手帳社

多羅尾 忠郎、一九七四、『千島探検実記』、国書刊行会

千葉稻城、一九三五(大訂正三版)、『北海道名所舊蹟』、小島大盛堂

寺澤 一、和田敏明、黒田秀俊・編、一九七八、『休明光記』羽太庄左衛門正養、叢文社

畠山 健・編、一八九一、『桂園遺芳』、博文堂

平凡社地方資料センター・編、『日本歴史地名大系』

七 一九九三 福島県の地名

北海道庁・編、一九七七、『千島概誌』、国書刊行会

森 莊己池、一九七七、『私残記』、中央公論社

守屋嘉美、一九八二、『蝦夷地警備』、↓河北新報社

吉田武三

一 編 一九六九（二刷）、松浦武四郎『東奥沿海日誌』、時事通信社  
 二 校注、『三航蝦夷日誌』、吉川弘文館  
 上 一九七〇 下 一九七一  
 吉田東伍、一九七六（三版）、『増補 大日本地名辞書』八、富山房

（札幌大学教養部教授）

# 索引

該当月日を示す。5—6は五月六日、  
 6—7—9は六月七日と九日、後六月は  
 後6で示した。

## 和歌

## あ行

あかつきし

7—1

あさな／＼

7—23

足のふむ

後6—13

朝風に

7—8

朝風の

7—15

あつさゆみ

6—13

あとはかも

後6—6

あなうれし

5—20

行きとも

後6—8

いたつらに来て

5—21

いたつらに待ち

後6—27

いづくにて

5—29

いつしかと

7—22

いとせめて

5—16

今もまた

後6—12

色も香も

6—15

岩の上に

5—13

海路 真帆あげて

6—27

打わたす

5—28

蝦夷がきる 5—13  
 えとろふの 5—17

惜しからぬ 後6—1

おなしくは 5—13

おもはぬを 後6—27

おもひやる 6—20

おろかなる 5—22

か行

かくとしも 後6—29

かくはかりあやしき 後6—13

かくはかり露 7—22

帰らむと 7—23

かへり行 7—16

帰るひは 7—2

黄葉の 後6—27

君が代の 後6—3

くれぬとて 5—28

こゝろまで 後6—27

心をば 6—18

言さへく 5—19

此島の 5—28

さ行  
 さしてゆく 後6—16

敷妙の 5—1

しとかつふ 6—10

すむ人の 4—19

其さまは 5—8

其人の 6—21

た行

たちかへる 後6—6

棚機は 7—6

誰にきて 4—19

月かけと 後6—15

つく／＼とおもひ 7—1

つく／＼とこゝろ 5—16

つゝかなく 6—27

劔たち 後6—29

照す日の 後6—23

手を折りて 後6—1

遠しとも 後6—19

時しらず 5—28



時ならぬ 6 | 27  
時ならば 6 | 21  
とし毎に 5 | 16

な行

ななれくる 5 | 28

なみたにも 後6 | 20

浪の上に 5 | 1

ぬは玉の 7 | 21

ねかふこと 7 | 6

は行

はかなくも 後6 | 29

花鳥も 5 | 28

離れたる 5 | 28

春秋も 4 | 19

はる／＼と 後6 | 19

ひさかたのそらさへ 後6 | 20

久かたの天つそらより 5 | 1

久方の天つみそらも 後6 | 28

一とせの 後6 | 30

ひとひたに 7 | 21

ひるのまは 6 | 2

ふるさとに 後6 | 29

ふるさとの事語り 後6 | 10

故郷の事も 後6 | 1

ふるさとのたより 7 | 4

ふるさとの夢 6 | 2

古里にありてはう 6 | 18

故郷にありてなり 5 | 28

故郷のこと 6 | 10

故郷のたより 5 | 28

ま行

待しかひ 6 | 27

待々し 後6 | 3

真帆あげて 後6 | 27

道にして 5 | 15

道もなきみち 5 | 28

道もなきをさゝ 7 | 3

六月の 後6 | 30

みなとまで 後6 | 15

見れど／＼ 5 | 28

や行

夢としも 6 | 18

よそながら 5 | 28

夜もすがら 7 | 16

わ行

我おもふ 後6 | 27

吾国の 4 | 19

吾ために 後6 | 19

吾ふねも 7 | 8

わかやとの 後6 | 27

分入て 5 | 26

をしからぬ 6 | 1

題詞 後6月27日

紅葉 黄葉の

海路 真帆あげて

橋 わかやとの

後朝戀 いたつらに

片思 我おもふ

おもはぬを

旅 こゝろまで

寿と壽など異字体が混在する場合は特  
に示していない。

人名

岩浅 6 | 28 参照↓岩崎

岩崎 5 | 28 参照↓岩浅

大島 7 | 6

神尾 5 | 16、5 | 22

黒川 5 | 16、5 | 22、5 | 28

小菅 7 | 6

五郎治 5 | 4

近藤 5 | 22

佐藤 5 | 16

佐藤英明 5 | 13 ↓英明

左兵衛 5 | 4

高田屋嘉兵衛 5 | 28

高野 知哲 後6 | 18 仙台備頭 7 |

10 高埜雅楽

中西 5 | 16

中村寿塚 5 | 19

中島延親 6 | 16

野呂 5 | 16、5 | 22

早川 5 | 17、6 | 29

英明 ↓佐藤英明

牧 5 | 28

根上 7 | 6

山岡 6 | 13

要助 5 | 12

利喜主介 5 | 12

事項

あいの 6 | 16

赤人 6 | 13 後6 | 3 | 15 | 27

アザラシ あさらし 5 | 13

厚司 5—13 あつし

あひき 網引 後6—24

裕 6—27

イヶ 7 Cynanchum caudatum Maxim. 7—3

浮木 5—19 うき

うとう 善知鳥 5—17

蝦夷 6—16

蝦夷言 6—14 後6—14

大釜 後6—24

おとな役 6—16

貝吹の司 5—29

鯨 6—16 後6—17

熊 5—28 6—16 21

胡津古 5—19 ヨッ Cyclopteri

chrys ventricosw

衣かへ 6—27

サケ 鮭 後6—23

新シヤモ 6—16

陣屋 後6—23 24

棚機 7—2

夏の祓 後6—30

野火 6—3

端舩 6—15 はし舟

番屋 後6—24

ホトトギス 時鳥 郭公 子規 5—20

6—8 6—27 山 郭公

鱒 後6—24

麻無保鳥 5—19 マンボウ Mola

mola Linn.

村方(庄屋 組頭 百姓代) 6—16

らつこ 5—27

をとな 6—16

## 地名

アトサノホリ 挾捉—紗那郡界 安止佐

能保里 5—27 安登佐能保里 阿斗佐

能保利 安登左能

保里 5—28 6—18 後6—16

アリムイ 有萌 紗那郡紗那村 阿理牟

夷 5—27

アン子ベツ 安根別 5—28 岩

ウエムツクシ 宇恵無津攻志 5—28

江差 渡島国江差郡江差町 7—6

蝦夷か嶋 5—28

蝦夷地 後6—19

恵登呂府嶋 6—16 挾捉島

オイト 老門 追戸 振別郡振別村老門

進見山 5—13 追戸(ツイト) 27

オトイマウシ 乙今牛村 蕊取郡 乙夷

万字斯 5—27

オンネウムロクシ 5—28

カムイサシコロ 加武者四古魯 5—27

樺太 サハリン からひとしま 6—13

国後島 久南斯里嶋 後6—16、18

ケラムイ 虻向崎 国 泊村 化良牟威

後6—24

サン子ウムロクシ 呼尤禰有牟呂苦志

5—28

シトカツカルシ 単冠山 振別郡 斗

加津不加留志 5—27 6—19 志とか

つふかろし

シベトロ 蕊取郡蕊取村 志倍斗呂 志

部斗呂 5—4 桂 5—27 志反止呂

シヤナ 紗那 斯耶奈 斯耶奈 5—4

斯耶 5—17 斯耶奈 5—27 斯耶奈

セセキ 瀬関 後6—17

タンネモイ 挾捉郡丹根萌 太牟湮門夷

太牟湮門夷 5—4 丹禰母夷 5—27

チャチャノポリ 茶々岳 国 知也々々

能保利 後6—16

チャラリシベ 知邪良里四郎 5—13

チリツブ 散布 知里津不 5—27

テリケウシ 天理伎禹仕国後 後6—24

トクヤマイ 5—27

トマリ 泊 国 登麻利 後6—18

19

ナイホ 内浦 奈伊保 奈夷保 5—27

後6—11

根室 根諸 7—22

野付 根室地方野付 7—22

ノトロ 野都魯 5—17 後6—15 野

都 呂

ノテト 能天登 国 後6—17

箱館 函館 5—14 28

久之浜 福島県いわき市久之浜町久之浜

(旧岩城国檜葉郡久之浜村) 7—1

ヒライト 5—27

フレベツ 振別 風鈴別 4—19 5—

4 5—27 後6—19

ホンウムロクシ 保六字武呂苦志 5—

28

ベツトブ 別飛 5—27 陪登手武

マクヨマイ 馬久與麻以 5—29 か

万久與麻以

ユウマンマイ 有満舞 5—27

羅禹士 5—27

羅禹士 国 7—23 羅禹士

ラッコ島 羅胡嶋 5—27

ルベツ 留別 留部知 5—27 6—3

ワタライアマンベ 和多羅伊安万六辺

5—13